第23回作家展

会期／前期　平成26年10月17日（金）～10月22日（水）
　　後期　平成26年10月24日（金）～10月29日（水）
会場／さいたま市大宮盆栽美術館
主催／日本盆栽作家協会

梔 子（クチナシ）　鉢：海鼠外縁長方
山田登美男（埼玉県）

クチナシの名前の由来は、果実が烈開しないことから「口無し」といわれてきたことです。これからは日一日と紅色となり、美しい宝石のように輝いてくることでしょう。この梔子の盆栽は、昔から有名な盆栽として大切に培養に努めてきました。初夏に５弁で咲く真白い花も蝶が舞うように印象的に心に残ります。

梅もどき　鉢：緑寿庵　　加藤 寿（千葉県）

隆起した根元から力強く立ち上がった幹模様が大樹のような趣をたたえている本作は、私が 20 年以上にわたって作っているものです。今年は深紅の華麗な果実がたくさん実を結び、今回の出品に至りました。この時季ならではの彩りをお楽しみください。

赤 松
鉢：紫泥輪花
山田登美男（埼玉県）

秋の静かな景色に調和した古木な赤松の文人木は、私の作風の一つのテーマであり新作です。本樹には、旅人が一休みしたい、そんな野趣な味わいを感じることができるでしょう。根元に個性的な芸があり、サバ幹の厳しさが孤高な佇まいを見せている作品です。

真 柏　鉢：紫泥外縁輪花式　　福舘 治（岩手県）

大きくねじれた、白骨化した枝（ジン）を引き立てる為、昨年、枝葉を半分の量にしました。古色感を表現したくて、極力、葉を透かし、枝の線が見える様に作出してみました。

長寿梅

鉢：朱泥袋式楕円

今井 千春（神奈川県）

この長寿梅は、７年前に入手しました。以後小枝作りに専念し、現在に至ります。時間の経過とともに小枝も古さを増してきたので、鉢合せにも配慮し、朱泥袋式楕円に合せ、古相感を表現してみました。

五葉松（銘：吾妻錦） 鉢：行山輪花　　阿部 健一（福島県）

樹齢、実生 86 年、盆養歴 55 年。最初の正面は、現在の左側面でしたが、23 年前に先代より引き継いだ後、後側に位置していた２本の幹のうちの小さい方の幹の存在をより強く表現してやりたいと思い、右側面を現在の正面に作り変えてみました。

赤 松
鉢：南蛮丸
矢内 信幸（大阪府）

赤松がこれほどに力強く踊る姿の盆栽は珍しい。山水の芸術といわれる盆栽ならではの見せ場を作ってくれている。松の持つ生命力、活力などを表現して独特な枯淡な味わいを覚える。

檜（ひのき） 鉢：南蛮丸　　米沢 増雄（東京都）

大変に鉢持ち込みの古い盆栽であり、先ず主木が力強くしっかりとして理想的な寄せ植枝法である。最近、檜の盆栽展示が数少ない中、日本の原風景を感じさせる秋の山里の姿であろう。

花 梨
鉢：中国鉢新渡瑠璃長方隅切
野上 寿明（富山県）

25 年ほど前にまだ手入れのされていない原木を譲り受け、今日までできるだけ切りつめながら作りこみ、現在の姿になりました。

第23回作家展　続き

黒 松
鉢：和外縁隅切長方
小林 國雄（東京都）

表裏を逆転して、右に落ちた太い枝を個性にして、前正面のサバ幹の欠点を隠し右流れの躍動感ある樹形にしてみました。

赤 松（題：雲月清風）　鉢：飴釉南蛮丸　　須藤 雨伯（栃木県）

この作品は、盆栽大家　高木禮二氏から受け継いだもので 10 年になります。盆栽は、鉢持込みにより、自然の力で人の作意を超越し天工により神聖なる盆栽となっていきます。盆栽の美は自然の客観的な表現だけでなく、更に「心に感悟可能」な主観的な表現を重んじます。盆栽の中に詩や絵の境地なき作品は霊魂なき作品となってしまいます。

仏手柑（ぶっしゅかん）
鉢：海鼠輪花下方
菊岡 成泰（奈良県）

見事に大きな実。この不思議な形の果実は仏の手に似ていることから仏手柑といわれる所以である。お正月などに飾ると添景として人気があり、輪花の下方鉢とよく調和して楽しいものである。

ちゃぼひば　鉢：和丸　　吹田 勇雄（宮城県）

細幹で飄々とした樹形は高さを感じ、落ち枝には時代感と品格を感じます。この木を眺めていると、文人と言う修羅の中に本当の美しさが有る様な気がします。今や盆栽 (Bonsai) は世界共通語。アジア諸国、ヨーロッパ地方の盆栽を数多く見ていますが、中でも中国の盆栽が極めて発展し目を見張るものが有り、私たち日本の盆栽作家も、更に心豊かに作品と向い合う必要が有ると考えております。

五葉松

鉢：和楕円水盤

馬場 守一（群馬県）

曲がりの激しい松を石付きにし、自然景観を連想させるようにしました。

五葉松　鉢：紫泥切足胴帯長方　　養田 昂之（群馬県）

古色蒼然たるたおやかな樹姿、華麗にして瀟洒（しょうしゃ）な趣、個性的な落ち枝の線と絶妙な植え付け位置から生まれた余白との調和が、この作品の品格をより一層高めている。

花 梨
鉢：均窯太鼓丸
秋山 実
（山梨県）

この花梨を手がけるにあたり、素材の持つ自然な幹流れを重視し、さらに枝つきの良さも加わり、故意の枝作りをせずに自然な枝ほぐれを出すよう培養管理に努めました。

黒 松　鉢：和外縁六角　　神成 由佳（東京都）

立ち上がりから右に吹き抜ける風は強く、長い年月を刻んだ黒松です。半懸崖の力強い樹形は理想的で、断崖上の厳しい景色を連想させる作品に仕上がっています。

花 梨

鉢：白交趾楕円

小林 國雄

（東京都）

芸術作品に最後に求められるものは「品位」であります。この花梨は、根張り立上りに品格と風格が備わっています。